ネギの弟？に転生、適度に生きたい。

BLOOD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ネギの弟？に転生、適度に生きたい。

【Ｎコード】
Ｎ７７５０Ｐ

【作者名】
ＢＬＯＯＤ

【あらすじ】
チートな魔眼持ちな主人公が、ネギま！に転生。
いったいどうなることやら、なんとか読めるものにするため努力します。
（最強系になると思いますので、抵抗ある方はブラウザバックをお願いいたします）

プロローグ

昔から不思議な力は持っていました。
えぇ、叡智の魔眼って名前を付けたんですけどね。
中二とか言わないで下さい。
ちゃんと意味はありますよ？
名付けるってことは意味を持たせるって事ですから、より強力に扱いやすくなりましたし。
そんな魔眼の効果は、あらゆる物を解析して理解するしかも完全瞬間記憶能力がデフォというチート性能です。
はいチートです。
だから、勉強とか超楽勝ですよ。
何より良いのが、赤の魔本の持ち主や、その魔物の子供の兄のパートナー達の使っている物は答えが分かるだけですが、叡智の魔眼は答えが解る事です。
物事を完璧に解析してそれを理解する叡智の魔眼の方が応用力があって非常に便利です。
そんな魔眼を持って生まれ、天才や神童と言われ育てられた僕ですが・・・・、

今絶賛瀕死中。

いや意味わからないですよね。
実は僕、今鉄骨の下敷きになってるんですよ。
何故そうなったかというと、子供を助けるためだった・・・なら格好も着いたんですけどね、本当に事故なんですよ。
最初に、僕に向かって車が突っ込んできたんですよ、ですが僕は魔眼持ちっ子。避ける最短、最善をすぐさま、解析、理解そして車は避けたんですが、上を見れば鉄骨が落ちてきているではないですか。

避けたかったです。
でも、僕の身体能力は並程度しかも体勢を崩した所です。
結果は当然下敷きになりました。しかも運悪く縦に落ちてきた鉄骨がＨＩＴ、お陰様で上半身と下半身が泣き別れしました。
という訳だったんですが。おふざけももうお終いですかね。
周りの音が聞こえません。何か言ってますが、もう目も見えなくなってきましたね。
瞼が・・重・・・い。
あ・ぁ・・・死にたく・・・ねぇな・・・・ぁ・・・

プロローグ（後書き）

彼の魔眼は某神様だって殺して見せる魔眼の如く、使いすぎると情報で脳がパンクしてさようならすることがあります。ですから、チートではありますが、無敵ではありません。

最初に補足説明させていただきました。
どうもはじめましての方ははじめまして、ＢＬＯＯＤです。前のＳＳは無期限凍結しましたが、こちらは最後まで書ける・・・といいなあ。
いや頑張りますけど。
不安もあるんです。
こんな作者ですいません。
ですがなるべく頑張りますので、生温かく見守ってください。
あ、あと感想で指摘やツッコミ、たたきもしてもらって構わないのですが、マナーを守らない書き口調だった場合には遠慮なく削除させていただきますので、ご了承ください。

チート魔眼持ちっ子爆☆誕。ネギま！世界ですか、此処でも変わらず大人が怖い

タイトル通り、ネギま！に転生しました。
いぇーい、しかも、ネギの双子の弟、ロギとして、いやぁ、作者も安直ですねぇ、ネギの兄弟なんて、ありがちなテンプレをかますなんて、このＳＳ面白くする気あるんでしょうか？
え？　これ以上メタすんなって？　わかりましたよ。でもいいじゃないですか、最初で最後のメタなんですから、まぁ良いです。
で、ですねぇ今現在、目の前で両親がラブラブなコントかましてくれてます。
えぇ、今僕は赤さんです。しかし、母親がきれいですね。
父親もかっこいいですし、将来僕もあんな風になるんでしょうか。
非常に楽しみです。
今のところは僕もネギも父親似ですね、まあそんなところですか、しかしもう他に特筆することがないですね。
どうやらこれから村に僕らは預けられるようです。

それから三年後

僕は鍛えていました。
主に肉体と精神面を。
いやーネギま！の原作は読んでいましたよ。
大体３０巻位まで、それによると、悪魔たちによる村の襲撃まであと一年無いじゃないですか。
ですから、せめて魔力使用可能な量を増やすため、可能な限り動くために、精神修養と肉体鍛錬をしているんです。

しかしこの肉体、ハイスペック過ぎます。
確かに僕は眼による最適な訓練方法を探して、それを忠実にこなし

ているとはいえ、普通三歳の子供が二キロ走ってまだ余裕あるとか、十キロぐらいなら問題ないですよ。魔力も気も使って無いっていうのに、ありえねえ。
とか思いつつ山道を走っています。
え？　なぜ山道かって？
大人が怖いからです。一回本国の人が見に来た時僕らスプリングフィールド兄弟について聞き込みみたいなことしてたんですよ。
本国僕らを取り込む気マンマンみたいです。
さらには、村の人たちまでスタンおじいちゃんと、ネカネお姉さんとアーニャとその両親以外は僕らに英雄のフィルターを通してくれやがりますので信用できません。
英雄の息子なんて足枷でしかないのかもしれません。身体能力とかは高いのですが。
今は悪魔襲撃の時に死なないように自分を鍛えるので精一杯ですね。
さあ僕は生き残れるのでしょうか？
生き残りたいなぁ、僕はまだ生を堪能していないんですから、死んでやるわけにはいきません。

悪魔襲撃、シャレになんないですってマジで

真っ赤だった。赤い、朱い、赫い、紅い。
世界は紅蓮の赤に染まっていた。
そこかしこには、この幼い身からすれば高い石塔が並び立っていた。
見慣れ、走り回り、慣れ親しんだ、のどかで、どこか活気のあったこの村はすっかりその様相を変え、どこか歪な石塔が並び立つ紅蓮の世界へと変わり果ててしまっていた。
覚悟していた。
いや、覚悟していたはずだった。
こうなることは原作知識を持つこの身はすでに知っていた。
いや、知っていたはずだった。
知っていたというのに、この世界を創り出した要因の一つであるのに、背負うつもりであったその責任も罪も、計り違えていたのだ。
確かに歪な石塔と化したのは己や、いまだ純粋な兄ネギを英雄の息子というフィルターを通して見ていた者たちだが、確かに可愛らしい子どもと見、接していてくれたのも確かなのだ。
そんな慣れ親しんだ顔ぶれも、いまやこのおぞましい世界を形作る歪な石塔という要素になり果ててしまっているのだ。たとえこの瞳を使おうとも長らく石の呪縛に囚われることになってしまう物になった、してしまった。その原因の一つが自分。
違う、そんなつもりじゃ、そんなつもりじゃなかったんだ。こんなおぞましい世界の一つにするつもりなんてなかったんだ。こんな、こんな、
ご、ごめんなさ、ふざけるなあああああアアアアアアアアア嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼ァ嗚呼ああああああああアアアアアアアアアアアアああ嗚呼嗚
呼アアアア嗚呼嗚呼嗚ああ嗚呼嗚呼ああ嗚呼嗚呼アア嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼

嗚呼嗚呼ァ。
ふざけるな！！　この世界を創り出した責任の、罪の、咎の、業の、罰の、重さを計り違えた。だから弱音を吐くだと！　いや、ましてや謝罪をするだと！！　ふざけるな！！！！
僕の覚悟はこの程度だというのか、この重さに耐えることすらできずに潰れ、跪き、頭を垂れるというのか、この重さに耐えられないからと言って、己だけ謝罪をして、楽になろうというのか、そんなことが出来るか！！
そんな無様にならないと昔誓っただろうが。
まだ■■　■■だった時に。
前世では死にかけることなんてざらだった。
子どもの頃は物を視過ぎて、脳がトロけるかと思うくらい頭が熱くなることがあった。脳の回路が焼き切れるのかと思うこともあった。
成長してこの眼を制御出来るようになって天才と呼ばれるようになってからは、この頭脳や手に入れた賞金を狙って誘拐・拉致されかかったことも数えきれない。
一度だけ本当に拉致されたことがあった。
その時僕の賞金や情報、頭脳を使うために拷問をしてきた。
爪を剥がされ、皮を剥がされ、鞭で打たれ、針を刺され、肉を切られ、骨を折られた。
僕は泣き叫んだ、けれどそれで相手は興奮し、油断したのか僕が無理をすれば自由に動けるときに後ろを向いた。
僕は眼を使い相手を気絶させた。そして相手にそっくりそのまま同じことをやり返してやった。
するとどうだ、そいつは泣き叫び、媚、何でもするとまで言ってきた。
僕はそれに対して今までの怒りすらも児戯に思えてしまうほどの憎悪を覚えた。
僕にこれほどのことをした奴が自分がしたことをされる覚悟すら持ち合わせていない奴だったことに、異様なほどに腹が立った。

その時の奴は無様だった酷く愚かなくだらない存在に見えた。
だから誓ったんだ。
こんな存在には決してならないと。
だから、謝らない。
必ず僕が、いや、もう僕なんて弱弱しく己を呼ぶものか、俺が、必ず俺が、この村のみんなを、治す。
これは新たな誓いだ。
己を絶対という名の鎖で縛る誓い。
もはや呪いとも言えるそれを俺は通す。
そのためにまずは生き残らなくては。
そんな時一体の悪魔がこちらにやって来るのが見えた。
その瞬間全身の毛が逆立った。そんなことはアリエナイと思った。
あまりもの圧迫感、暴虐なまでの威圧の力、一般の魔法使いなど優に超える魔力を誇るこの身の魔力すら半分に満たないというのに、それすらも世界の制約による縛りでアホらしいほどの枷を負っている状態だと判るほどの格の違い。
一見若々しく、美しい黒髪の持ち主であるのに、悪魔と確信できるほどの邪悪な力の持ち主。
ゆっくりとした足取りであるのに彼は既に俺の目の前にいた。
彼の異常さ故に眼で視て名を知り、俺はアリエナイとさらに脳で反芻し、茫然としていた。
だから、俺がそれを口にしたのは偶然で、彼がそうしたのもきっと偶然なのだ。

「ルシ、ファー。」

「なに？　小僧、お前どうやって俺の名前を知った？　む、その眼か。」

そうやって奴は俺の顔に手を置いた。くそ、何とか逃げ切れないだ

ろうか、いや絶対無理ですけど、それでも逃げ切らないと、先の誓いが無駄になってしまう。

「む！？　なんと叡智の魔眼とはな、まさか根源の一端とも言える魔眼が、人の身に宿るか、面白いな、こうしている間にも逃げる算段を無駄と完全に理解しつつもしているお前もな。」

「っっ！？　思考を読みましたか、嫌ですね、僕は死にたくないんですよ。僕の生き残る芽を摘まないでくれませんかね。圧倒的強者でしょうが、あなたは。」

「まあそうだが、今すぐお前を殺す気はないからな、そう怒るな。」

「ハ！？」

思考が完全に停止した。

「何をそんなに驚いている。言っただろう。お前は面白いと。」

「だったら、さっさと見逃してくれないか？　さっきまで極限状態だったんだからさ。」

口調が荒れたのはご愛嬌だと思って欲しい。

「まあ、待て。俺は面白そうなことはさらに面白くしたくなる質でね。おとなしくしてろよ。」

そう言って俺の顔に再び手を置いたかと思ったら、眼に激痛が走った。

「っっっ！！！　何をした！？」

「何そう焦るな、お前の魔眼の視えるものを増やした。本来ありえざるものを視る魔眼。人間は淨眼といったかな、それを追加した、それを持ってお前がどう生きるのか時折見させてもらうよ。永き時を生きていると暇なんだ。娯楽の一つもないとな。」

「そうですか、まあ今生きれるならそれで良しとしますが、気を付けてくださいね。その首が人に切り離されないようにね。」

人の人生を娯楽にするのだから、それくらいの嫌みは言わせてほしい。

「ふはははは、それも一つの楽しみさ、俺ほど力を付けるとまともに戦える奴なんてそうそういないからな、ほら、あっちには悪魔はいない、既に倒された。生き残れよ小僧、いや少年。いやなかなかに面白かった。」

そういって奴、いや彼は消えた。
彼の示した方に逃げると確かに悪魔は既に倒されたようで、簡単に逃げられた。
そうして俺は魔法使いらしき人々に救助された。

悪魔襲撃、シャレになんないですってマジで（後書き）

主人公強化、これからも大量強化するつもりです。多分自重はしないです。
それでも良い方はこれからもよろしくお願いします。

メルディアナ魔法学校卒業（はやっ。）（前書き）

オリ設定などが入ります。予めご了承ください。

メルディアナ魔法学校卒業（はやっ。）

魔法使いらしき人達に助けられました。ロギ・スプリングフィールドです。

いやー、皆さん聞いてください。
俺が助けられたときに、名前を聞かれたんですけど、ロギ・スプリングフィールドって答えたら、疑われたんですよ、その後救助されたネカネお姉さんに会うまで。
しかも、ネカネお姉さんも会ったときに、怖かったのね、ロギ。もう大丈夫よ。とか、言われて首を傾げてたんですが。
鏡を見て理解しました。
鏡の向こうにいたのは、

髪が真っ白になった自分でした。

・・・・いや、びっくりしましたよ！？
だって、ふと鏡を見たら見慣れた自分の２Ｐキャラみたいなのが、こっち見てるんですよ！！
反射的にこっち見んな。って言った自分は悪くないと思いたい。

で、当然すぐ眼で調べたんですが、なんと実は、
ルシファーのせいだったんですよね。
あいつ俺の叡智の魔眼を強化したじゃないですか。
その結果、

七つの大罪の傲慢。
魔王ルシファーの加護。

元々、天使の最高位、大天使長ルシフェルが堕天し、魔王になったルシファーの加護。
光と闇の魔法適正が大幅に上がり、魔力も増大する。しかし、加護を受けると色素を失ってしまう。

ナニソレ！？
別に望んで加護を受けた訳じゃないのに、また面倒な。
道理でさっきから、やたら日差しが強いと思いましたよ。
肌も紫外線に反応して、赤く焼けてしまっていますし。
お陰様で、紫外線をカットする魔法障壁張り続ける嵌めになりました。
元々砂漠とかで使うやつなんですけどね。

お陰で、ネギとアーニャに超びっくりされました。
二人とも大丈夫よ。とか、お兄ちゃんがいるよー！？とか、言われました。
二人とも慌てていて、和みました。
子供は可愛いです。

まぁ、そんな事がありながらも、メルディアナ魔法学校到着。

まずやることは、
教科書の暗記。
いや、基本は大事です。
まぁほとんど解っていますが。
歴史とかは知らなかったので丁度良かったです。
まぁほとんどがメガロメセンブリアに都合良く改竄されてるっぽいですが。

次は、禁呪書庫の本全解析。

これがまた、警備がザル過ぎるんです。
一応かなり重要なものは、魔法でロックが掛けられてますが、この眼の前にはほぼ意味無し。
楽々と知識系統の本は解析させて頂きました。

本当にありがｒｙ。

そして、俺もネギも、６歳ほどになったある日。

「・・・別荘が欲しいですねぇ。」

全てはこの一言が始まりでした。

思い立ったが、吉日ならば、その日以降はすべて凶日。
ということで、

転移魔法符の販売始めました。

原作でたつみーが言ってたじゃないですか。
一枚八十万、と。

ですから、白紙の魔法符を購入し、それを手に入れた知識を使って、百メートル以内なら転移可能な魔法符を量産、販売して一寸した小金持ちに。

あと気になったので、何故転移魔法符が高価なのかを調べてみたのですが、どうやら転移の魔法を符に出来るだけでも、なかなか高度な技術らしく、可能な人物が少ないこと。
さらに、転移魔法符は起動のために少し魔力や気を流せば発動出来るように、転移魔法発動分の魔力を予め込めなくてはならず。

その魔力の量が、高位の魔法使いでも無視できない消費量なんですよね。
そんなわけで生産者が少なく、自然、高価になった訳だったんですが。

俺は生まれつき高い魔力が、ルシファーの加護で更に高くなっており、ある程度量産可能だったんですね。
ですが、

元々、一般の方々は転移魔法符など、買いはしないんですよ。
なので、売り上げもそこそこまで来ましたので、えぇ大体２４００万位ですか。これを元手に、株をやりたいと思います。
証券口座を作って、いざスタート！

一ヶ月後。

くっくっく、ククク、クハーハハッハッハッハハー。最高ですね。
株。
いやー笑いが止まりません。
誰が予測したことでしょう！！？
たった一ヶ月で２４００万が２億になるなど。

えぇ、株に、俺の眼。大活躍です。
まず眼で最大限に上がる株を探して其処に、

全・額・投・資！！

そして上がりきったら売り払い。

これの無限ループで金が入ってくるのですから、もう笑いが止まりません。

が、

俺の目的は別荘を手に入れることですから、一旦ハイパー金儲けタイムは終了して、別荘を買いたいと思います。

何故俺が自分で造らないかと言うと、造るための機材が無く、買って持ち込むと別荘持ってるとか、造れる事がバレるからです。

麻帆良に行った後なら、魔法の実力がバレても構わないのですが、（学園長にはばれたくないですねぇ、出来れば。）メルディアナ魔法学校でバレると下手をすれば麻帆良に行けなくなる可能性も考えられますので。

まぁ、ある程度ならば改造も可能なので特に問題はありませんけどね。

と、言うわけで。

マホネットに、独自回線でアクセスして、ダイオラマ魔法球を検索。

お～、出てきましたね。　色々ありますが、そこそこ広く、時間も一時間を一日にする南国リゾートにしました。

平たく言えば、吸血ロリババアの別荘とほぼ同じものです。

しかし高い。

１億８０００万しましたよ。

まあ、他に余りお金は使いませんから構わないのですけれど。

まあ、これでやっとまともに石化解除薬の研究と、戦闘訓練が出来るってものですよ。

原作通り、村の皆の石化って、ヘルマンの永久石化なんですよ。

でですね、永久石化ってまともな呪文で解除できないんですよ。

例えば、近衛木乃香のハエノスエヒロのように、３０分以内ならステータス異常全回復、とかのように何かしら制約のある魔法やアーティファクトとかじゃないとね。
しかし、そんな魔法はまず無いので、特別な魔法薬を作ったりしないとまず治らないんですよ。
だったら作れば良いじゃない。
とか、思うかも知れませんが、魔法薬っていうのは情報が解れば作れるような物じゃありません。
大体、特殊な材料とかが必要になってくるのですが、大体絶滅してたり、かなり特殊な場所にあって取りに行けなかったり。
もしくは希少過ぎて見つからなかったりするんです。
それなら眼を使えば良いと言うかもしれませんが、俺の叡智の魔眼はノーリスクで使いたい放題って訳じゃないんです。

探るもの、解析するもの、その対象の神秘が強かったり、希少であればあるほど探し難く、解析しにくいんです。
だから無理すれば探せなくはないですが、下手すると処理しきれない莫大な情報量や人が知ってはいけない領域の情報まで解析して、頭がオーバーロードして、死にかねません。
だったら、まだ地道に研究した方が確実に石化解除薬を作れますから。

俺の人生の目標は確かに石化解除もありますが、あくまで、適度に生きること。
適度に友人を作り、
適度に人を愛し、
適度に欲を満たし、
適度に快楽を得て、
適度にスリルを楽しみ、
適度に平穏に生きる。

これが俺の最大の目標。
だからその為にも、石化解除薬の研究と死なない程度の戦闘訓練が必要なんです。

だからこそ別荘を手に入れるんですがね。
呟きから始まったのは別に忘れてたわけじゃないんだからね！！？
ホントなんだからね！！！

・・・・・・うぇっ。

とりあえず、こんな風にふざけながらも時は過ぎ、メルディアナ魔法学校卒業の日。

「卒業証書授与――この七年間良く頑張ってきた。だがこれからの修業が本番だ気を抜くでないぞ。」

「ロギ・スプリングフィールド君。」

「はい。」

どうもロギです。
なんと、卒業しました。
あ、今の俺の容姿とか気になりますよね。
お教えしておきますね。

ネギの髪を白髪にして、背中の中程までの髪の毛を、ネギと同じ位の位置で纏めています。
それで、目の色を紅色にして、肌を白くして、表情をネギより少し硬くすれば、俺こと、ロギの完成です。
・・・はい、何処の学園都市最強の要素詰め込みやがりましたかって感じですよね。

あと魔法の成績はネギより若干下をキープしています。
魔法歴史学、魔法薬学、一般常識以外は。

ですが、実際は違います。本当は全て俺の方が上です。
別荘で死ぬ程色々やりましたから。
幻術で年齢偽ってますし。
実年齢１４歳ぐらいですから。
身長だって、今の姿は１４０センチメートル位ですが、もとの姿だと１８７センチメートル位あります。（１４歳でとかありえねー。）

などと内心思ってる間に、ネギ達が来たようです。

「ロギー、あんたは課題浮かんだー？」

「いや、これからですよアーニャ。アーニャはどうでした？」

「私はロンドンで占い師よ。ネギもまだ浮かんで無いみたい。」

「そうですか、おっ、浮かんできましたね。」

「僕も浮かんできたよ、ロギ。」

「そうですか、ネギ。では一緒に読み上げてみましょう。」

俺の思惑通りなら、

「「えーと、（ええと、）日本で先生をやること。」」

良かった。当たりましたね。

「「「「えっ？　えぇーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！？？」」」」

すごい音量ですね、鼓膜がさようならするかと思いましたよ。

そして皆校長に文句言ってますね。

まぁ当然ですが、援護射撃しますか。

主に不自然に思われないために。

「遂に頭が沸いてまともな思考が出来なくなりましたか。滑稽ですね校長。」

「相変わらず毒を吐くのうロギ。じゃが決定事項じゃ、最早覆らぬ。故に行ってこい。そして立派な魔法使い（マギステル・マギ）になってくるのじゃ。ネギ、ロギ。」

「はい、わかりました。行ってきます！！」

「はぁー、仕方ない。行ってきてあげますよ。どうせ何を言っても無駄でしょうから。」

そんな言葉を吐きつつも、俺は麻帆良へと旅立ったのでした。

麻帆良に到着。学園長（ジジイ）の頭があり得ないです、気持ち悪い。

どうも皆さん、ロギ・スプリングフィールドです。

今は麻帆良の女子中等部にある麻帆良学園、学園長室に向かっています。

で、電車に乗っているのですが、前世では絶対に乗りたくないと思っていた朝のラッシュ時の電車だというのに、非常に良いです。

なぜなら女子中等部行きの電車ですから。

周りはネギ以外全員女子ですので、おっさんの加齢臭も、オバハンの明らかに付け過ぎな香水等の臭気災害が０ですから。

これほど乗りやすい電車もなかなかありません。

「ねぇ、ロギ、日本は人がいっぱいいるね。」

「そうですね、ネギ。ですがこんなものでしょう。何せ麻帆良は学園都市なんですから。」

登校する生徒達が大勢いるに決まってますから。

「うん、よく考えたらそうかも。でもウェールズとは大ちが、は、ハ」

あ、ネギの鼻に魔力の一部が。

「ハクショーン！！！」

ぶわっ。

おっ、やっぱりですか。
しかし、白が4、青白ストライプが2、黒が3・・・中学生に紐は早くないでしょうか？
まぁ、眼福です。ごちそうさまでした。

おっ、着いたようですね。なにやらネギが騒いでいますが、そろそろ時間がまずいです。

「ネギっ！　走りますよ。」

「あっ、待ってよロギ。」

だが断る。

と言いたいですが、揃って行かないとまずいので、渋々歩調を合わせます。しかし、これからの問題はジジイとロリババア吸血鬼ですよ。
ジジイは色々な面倒事を持ち込んでやらせようとするでしょうし、エヴァンジェリンは襲って来るでしょう。
エヴァンジェリンは交渉でなんとかするとして、問題はジジイです。

究極、ジジイの面倒事は全部ネギに丸投げすれば良いのですが、そうするとネギが対処しきれない可能性が高く、結局周りを巻き込む形になって、自分に火の粉が飛んでくる事になります。
ヒジョーにめんどくさい。
そんな厄介事はごめんですし、薬の研究が遅れます。損しかありません。
本当にどうしましょう・・・・・ん？　あれっ？　ネギは何処に？
・・・・何をやっているんでしょうかあの愚兄は、どうしたら女子中学生に持ち上げられる様なことになっているのでしょうか？

あ～、よく見たら持ち上げている娘、鈴のついたリボンでツインテールにしていて、オッドアイですね、珍しい。

・・・・えぇ、完璧に神楽坂明日菜ですね、本当にありがとうございました。

つまり、この状況は原作第一巻での、初めてネギが自らの一般常識の無さを晒したシーンな訳ですね。

まぁ、俺も最初にこのシーンを見たときには、

・・・ネギ、君は阿呆の極みか。

とか思いましたけど、この行動の全責任がネギに在る訳ではないんですよ。

もちろん、責任の一部はネギに在りますが。

メルディアナ魔法学校ではネギは成績最優秀生徒なんですよ。俺以外では一部の成績でも勝れないくらいの。

しかも、ネギは最大の英雄ナギ・スプリングフィールド。つまりは、俺達の親父の息子。

更には、唯一、一部でも成績で劣っている相手は、同じ英雄の息子。

つまりは、双子の俺です。

あとの想像は比較的簡単ですね。

ネギは周りにちやほやされて育った訳です。

誰も、例え教師だろうが、いえ、教師だからこそ、”叱る”という行為をしなかったのです。

ネカネお姉さんも過保護でしたからねぇ。

唯一それっぽい事をしていたアーニャもネギに惚れてますから。

それに、ネギも頑固で意地っ張りで子供ですから、アーニャがしっかり叱っても効果は無かったでしょうし。

と、悠長に考察している場合ではありません。
とりあえず話しかけますか。

「申し訳ありませんが、俺の愚兄がなにかしましたでしょうか？」

声を掛けてみると物凄い勢いで振り向いた後、驚愕。という表現が正しく相応しい表情を見せてくれました。

・・・まず間違いなく、ネギと俺の容姿の違い、いえ、俺の容姿の特異さに、ですね。
完全にアルビノですし、俺。

「え？　あ、あぁ、え～と、アンタはコイツの弟さん？」

「はい。そうですが、ネギがなにかしましたか？　もしもそうだったら謝罪させますし、しますが。」

「べ、別にアンタは謝らなくていいじゃない。まぁコイツには謝って欲しいんだけど。」
「わかりました。とりあえずネギ。彼女に謝りなさい。」

「えー、でもロギ、僕は親切で言ったんだよ！」

「な、なんですってー！！　このガキっ！　あれのどこが親切なのよ！！！」

すごい叫びですが、現状に至った経緯を知らない（ハズの）俺はど

う言えばいいのか判断できませんので、そこで待ちぼうけ喰らっている天然っぽい娘（まず間違いなく近衛木乃香）に事情を聞いてみますか。

「えーと、そこの貴女。こうなってしまった顛末を教えて頂けますか？」

「ええよー。え～とな、まず、うちと明日菜が明日菜の恋占いの話をしてたんよ。」

「えぇ、それで？」

「うん。それでなー、そこにあの子。君のお兄さんがやって来てな、明日菜に、”貴女、失恋の相が出てますよ、それも、かなりドギツイのが。”って言うてもうてなー、明日菜が怒ってもうたんよ。」

えぇ、原作通りですね。
完全にネギが悪いです。

「ネギ、本当に謝りなさい。お前が彼女に言った言葉は、彼女を傷つける発言です。最低なことですよ。それでも英国紳士、いえ、男ですか！」

「うぅ、わかったよロギ。えーと、お姉さん。本当にごめんなさい。」

案外素直に謝りましたね。文句の一つも言ってくるかと思ったんですが。
最低や英国紳士という言葉が聞いたのでしょうか？

「ふんっ。まぁいいわ、許してあげる。次はないわよっ。」

「まぁ、それはそれとして、なんであんた達は此処にいるのかしら。此処は女子中等部のエリアよ、男が、ましてやガキが来る場所じゃないわよっ！」

まぁ、普通そうですよね。ですが残念ながら”普通”では無いんですよねぇ。

「いえ、俺達は・・・」

「いやーいいんだよアスナ君。」

やっと来ましたか、もっと早く来て欲しいですね、デスメガネ。

「お久しぶりでーす。ネギ君！　ロギ君！」

「え〝っ」

「あ」

「た、高畑先生！？　おはよーございま・・！」

「久しぶり、タカミチーーッ！！」

「！？・・・・っ。し、知り合い・・・！？」

「麻帆良学園へようこそ、いい所でしょう？　”ネギ先生”　”ロギ先生”」

「せ、先生？」

「あ、ハイそうです。」
「この度、この学校で英語の教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。」

「今回、この学校で数学の教師、他の教科の臨時講師をさせて頂くことになります。ロギ・スプリングフィールドです。」

全教科出来ますからね。

「え・・・ええーーーーーーーーーーーーーっ！！！！」

その驚きには全面的に賛同いたしましょう。
労働基準法に完璧に反してますし、子供が物を教えられるとは思いませんから。というか、たしかこの二人って、俺達の迎えという役割だったはずですが、本当に外見的特徴とか教えなかったんですね、あのジジイ。
しかし、どーやって見つけさせるつもりだったのやら、まさか運なんてことでは無いでしょーし、子供だから目立つとでも思って会うとでもほざく気でしょうか？　いまいちわかりません・・・「はくちんっ！！」・・・・ね？　・・・・

ん？　あぁ～、神楽坂、ご愁傷さま。
そしてネギ、お前はもう少し魔力を制御しなさい。

・・・しかし、毛糸のクマパンね～、少し子供過ぎやしないですか？

学園長室

今、全世界の人々に俺の心の叫びを聞いて貰いたい。きっと理解出来ると思います。
学園長。
そんなに頭の長い人類がいるかっ！！！
あり得ないでしょうがっ！、アンタはぬらりひょんですか！！？
何故にそこまで頭が長いんですか！？
・・・あぁ、気持ち悪い。もう嫌です。このジジイに会いたくありません。
なんて思ってるうちに、
「あぁ、そうそう。実は二人とも、まだ住む場所が決まっておらんのじゃよ。そこで、しばらくネギ君を君らの部屋に泊めてもらえんかの。ロギ君は他の子に頼んであるからのぅ。」
まて、このジジイ勝手に決めてやがりますね。
とりあえず、聞き出して気に入らないようなら変えさせましょう。
『学園長先生、聞こえますか？』
『ほっ？　念話かのロギ君。それでなんの話じゃ？』
・・・わかりきってるでしょうに、うざったいジジイめ。
『部屋の住人についてです。当然部屋の住人は魔法の事を知っているんでしょうね。』
『ほ、そんなことを知ってどうするつもりじゃ？　パクティオーでもしたいのかの？』

本当に喰えない上にうざったい。しかしそれが目的か。
やはり、パクティオー。
これをさせるのが目的。
英雄の息子を祭り上げるため、プロパガンダにするため、一般人すら巻き込むための、２―Ａ。
本気で喰えないじいさんだ。
やはり、好きになれそうもないですね。

『あまりにもくだらない戯れ言を言わないで欲しいですね。俺が聞いているのはその部屋の住人が魔法を知っているか否か。あとついでに名前を教えて頂ければ幸いですが？』

『ほ、大丈夫じゃよ。頼んである生徒は魔法関係者じゃ。名前は桜咲刹那君と龍宮真名君じゃ。二人とも指折りの魔法生徒じゃよ。』
成る程、あの二人か。
およそ入れられる部屋としては最上。
特に龍宮真名。
彼女は金次第で仕事を引き受けてくれそうですしね。特に問題は無いですね。

『わかりました、ありがとうございます。それでは、これからクラスの方に行きますので、』「失礼します。」

悪くない。なんとかなりそうではあります。
俺が適度に生きるためにはね。

ロギ達が退室したあとの学園長の独白。

「ふぃー、ようやく来たのう。」

ネギ君か、彼は純粋でまだまだ子供じゃのう。
まぁ、そうなるように教育したんじゃろうが。
確かに次代の英雄として祭り上げやすくはある。
そのかわりにまだまだ甘いが、そこはこれから成長出来る。

問題はロギ君じゃ。
彼は実に精神が成熟しておる。
ひょっとしたらそこらの魔法先生より遥かにのう。
しかし、所詮は子供。
制御するのは容易いじゃろう。
二人とも立派な英雄に育て上げねばな。
まったく。老いぼれには辛いわい。

麻帆良に到着。学園長（ジジイ）の頭があり得ないです、気持ち悪い。（後書き

少し学園長を悪役にさせてみました。
いかがだったでしょうか？
結局作者の推測ですが、学園長はこんな感じだと思うんですよ。
ですから、こういたしました。
きっとこれからも学園長に対する嫌悪は強まるにせよ弱まる事が無い気がします。
そこのところをご了承ください。

さぁ、バラシ始めますか。（主に魔法の実力を）（前書き）

ネギの弟？に転生。適度に生きたい。
の
ＰＶが５００００を突破。
ユニークが１００００を突破した！！

・・・・・ハイィ！！！？
びっくりしました。
いや、これっ、

ええぇぇぇぇーーーーーーー！！！！！

正直にびっくりしました。本当にありがたいです。

やはりネギま！のネームはでかい。

いつまでも前書きやっててもうざいので、本編へどうぞ！！

さぁ、バラシ始めますか。（主に魔法の実力を）

さて、うざったいジジイの部屋を後にしました。
ロギです。
２―Ａの教室に向かっているのですが、名簿を見て気になる人物がいました。

相坂さよ、彼女です。

彼女は幽霊になって６０年経つらしいですが、普通の幽霊が６０年も地縛霊やっていて、悪霊化や成仏していないのが、あまりに不自然なのです。
何故未だに浮遊霊紛いの地縛霊をしているのか、甚だ疑問です。

っと、考えている間に教室前ですね。
しかし、窓から教室内を見ると非常識の一言に尽きますね。

明らかに中学生らしくない体格の人（当然大小両方。）
どうみても達人の身のこなしの持ち主。

何を考えているのか、明らかに真剣を持ち歩いているこのちゃんジャンキーな辻斬り。

どう考えても現代科学水準を大きく越えた技術で造られたロボット。

中学生なのに、肉まんを販売している麻帆良最強頭脳。

さらには、半妖、半魔族、魔族、幽霊に真祖。

・・・・あり得ねーー。

なにこの人外魔境。（常識から逸脱しているという意味で。）
ジジイもかなり本気ですね。いや、監視の意味もあるんですかね？
というか、龍宮とレイニーデイは半魔族と魔族だったんですね。
知りませんでした。（３０巻までしか読んでいないため。）

さて、そろそろ教室に入らないとまずいですね。

「ネギ、行きましょう。」

「うん、ロギ。僕から入った方がいいかな？」

「そうですね、あくまで俺は副担任ですから、ネギからどうぞ。」

というかそうでないと困ります。
俺だと仕掛けられている罠全部突破してしまいますから。

そして、ネギが少しビクビクしながらも扉を開けて入ろうとすると、
上からお約束とも言えるお出迎え（黒板消しトラップ）の洗礼を一
度浮かせてから敢えて受ける。
・・・というか何故コイツは魔法障壁かけたままだったんでしょう
か？
麻帆良はジジイの陰謀とヨウジョ吸血鬼の襲撃以外危険な事は無い
のですが、まぁ、どうでもいいですね。それに、そんな間にネギは
罠に全部引っ掛かって愉快なことになってますし。

・・・・しかし、騒ぎ過ぎじゃないですかね。
これでは他クラスの迷惑になって、新田（鬼）が・・・・・。

よしっ、止めましょう。他のクラスの迷惑にならないように、二次災害が降りかからないためにも！！

「静かにしてくださいっ！！！」

ピタッ、シーン。

一応静かにはなりました。しかし、皆さんこちらを向いて固まってますね。

１００％俺の容姿のせいです。

便利と喜ぶべきか、異様と悲しむべきか。

まぁいいです。

とりあえず静かにさせるという目的は達成しましたから、ネギを救出してから全員席に着かせました。

そして、今まで目を回していたネギがようやく正気に戻ったのか紹介を始めました。

「ええと、あ、あのっ、僕、僕・・・・この学校でまほ・・英語を教えることになりました。

ネギ・スプリングフィールドです。

三学期の間だけですがよろしくお願いします。」

ドモリ過ぎですね、しかも一瞬魔法って言いそうになりましたね。

危なっかし過ぎますから。次は俺ですか、テキトーかつ無難にしておきましょう。

奇をてらう意味もありませんので。

「この度、数学の教師、及び全科目の臨時の講師、さらにこのクラ

スの副担任をすることになりました。
ロギ・スプリングフィールドです。
あぁ、後、名前からもわかるように俺とネギ先生は兄弟です。ちなみに、双子で俺が弟、ネギ先生が兄です。とりあえずよろしくお願いいたします。」

皆、目を白黒させてるか驚いてますね。
まぁ、無理もありません。何度も言う様ですが、
俺アルビノですから・・・・・・・・・。

放課後。

どうも、皆さん。
今は放課後です。
えっ？　あの後どうなったかですか？
特に何もありませんでしたよ。
質問ものらりくらりとかわしてやりましたし、
授業も当たり障りなくテキトーに公式頭に詰め込んでやりましたから。

問題はありません。
というか起こす程愚か者のつもりもありません。
あ、訂正します。
やはり問題は起こすかもしれません。というか起こします。
あくまで意図的にですが、・・・今みたいに。

そういえば、何処でどうしているか言ってませんでしたね。
今、俺は”甘味処やなぎ”で、白玉餡蜜食ってます。白玉うめぇｗｗｗ。

え？　それの何が問題かって？
それは「それで、先生。私に何の話があるのかな？」
・・・・・今のですよ、今の。
そう、俺が起こした問題というのは今現在進行中で、男性教師の俺と、担当してるクラスの女子生徒の龍宮が一緒にお茶してることですよ！！！
やっぱりこれは問題に・・・なりませんね、わかります。

そもそも、俺、子供でしたね。
盛り上がってから気づきましたが俺はまだ子供でした（あくまで外見的には。）。でしたら、問題ありませんね。
いやぁ、幻術掛けてますけど、実年齢１４ですからね、俺。
龍宮とタメです。よく考えれば。
・・・・・・俺にしても龍宮にしても１４歳離れした体格しｔ・・ゴリッ・・・・なんで俺の額に拳銃が突きつけられているんですかね。
「先生、此方の質問に答えずに、何を考えていたのかな？」

何なんですかねこの子。ニュータイプなんでしょうか？
というか新任の教師にいきなり銃突きつけるんですか、って突っ込んじゃダメなんでしょうか。

まぁ、いい加減失礼ですし、受け答えしますか。

「ええと、何のことでしょうか？　とりあえず下げて貰えます？

銃。」

「あぁ、わかったよ。
それで、私に何の用だい？」

「・・・学園長から話しは聞いてますよね？」

「あぁ、君が私と刹那の部屋に居候するという話か。」

居候って、まぁそうなりますが。

「えぇ、それです。
とりあえず今龍宮さんとお茶してるのは、その挨拶です。」

「そうかい、なら何故、刹那は誘わなかったんだ？」

「えぇ、誘おうとしたんですが、なにやら熱心に近衛さんをストーキングしていて、声を掛けれなかったんですよ。」

あぁ、龍宮が眉間押さえてますよ。
小声で、刹那ストーキングと勘違いされてるぞ。
とか言ってますね。

「そうかい。
先生、刹那にそういう趣味は無い、・・・はずだ。だから、刹那に偏見を持たないで貰えると助かる。」「・・・・・その間と、筈ってなんですか。より怪しげに聞こえますから。
まぁ、いいです。
どうせ、護衛でしょうから。」

一瞬、殺気が漏れましたよ。龍宮。

「・・・・何故君がその事を知っている？　君は只の修行中の魔法先生の筈だが？」

まぁ、そうなりますよねぇ。ですが、簡単に説明出来ますから。

「実は、俺とネギが持っているクラス名簿には少し生徒に関するメモが書いてありましてね。
桜咲さんのところには京都神鳴流と書いてありました。
そして、近衛さん。
彼女、やたら膨大な魔力を持ってますねぇ。
解放はされていないのか分かりにくいですが、そして近衛という名字。此所、関東魔法協会の理事である近衛近右衛門の孫にして、関西呪術協会の長にして英雄、サムライマスター近衛詠春の娘。
・・・護衛が付いてない方がおかしいですね。」

どうですかね、これで説明はつきましたが？

「・・・成る程先生は幾分頭が切れるようだね。
しかし、ネギ先生はまるで魔法関係のことに気づいていない。どうしてだい？」

「ネギはろくに世間の事を知ろうとしません。
あいつは今6年前に会った親父の後を追うのに必死みたいですし、
何より未だ純粋で、魔法は善と正義で溢れてると信じてますから。」
本当に現実が見れていない。

「そうかい、それにしてもその口ぶりだとロギ先生は色々知っているみたいじゃないか？」

「それは、そうでしょう。そう言っているんですから。メルディアナでは馬鹿な魔法使いが多くて呆れてたんですが、此所もそうみたいですね。
龍宮さんは例外みたいですが」

実際、現実が見れそうなのは龍宮、エヴァンジェリン、長谷川ぐらいですか。
他は皆魔法を幻想の類いにしか見れないでしょう。
他は現実的に見ているようで、魔法に夢や希望を見ようとしますからね。
別にそれが悪いとは思いません。
夢や希望は生きるのには必要なことですし、それが力になることもあります。
大切なのは過信、盲信し過ぎないことですから。

「まぁ、そんな話しはここまでにして、どうして私にそんなことを話したんだい？　先生。別に普通に同居するだけならこんなことを話す必要は無いと思うのだが。」

いいですね、理解が早い子は好きですよ。

「実は、俺、魔法薬作ってるんですよ。わけありで。止めるわけにはいかないものですから。」

「成る程。だが、只の部屋で出来るのかい？　魔法薬作成には明るくないが、只の部屋では出来ないんじゃないか？」

「いえ、容認して貰いたいのは魔法薬を作成することじゃなく、ダイオラマ魔法球の使用と、黙秘です。」

「！！！　驚いた！　ダイオラマ魔法球を持っているのかい？　先生。」

「えぇ、それで、黙っていて頂けますかね？」

俺の予想が正しければ、

「・・・条件がある。」

やっぱり。
俺が取引を出来る程度には大人だと分かっている。
そして、可能な限りの益を得ようとしている。
いいですね、俺好みな性格しています。

「・・・条件、とは？」

「ダイオラマ魔法球の使用権だ。」

成る程。
妥当な所ですね。今見えている俺の許容可能範囲で利益が最大で、
俺の被害が最低な物を選びましたか。
良い手腕（うで）してます。
「良いですよ。それではこれで取引成立ですかね？　龍宮さん。」

「ああ、取引成立さ。
あぁ、それと・・・」

なんですかね、まだ何かあるのでしょうか？

「・・・名前で良い。」

「ハイ？」

「だから、名前で呼んでくれて良いと言ったのさ。ロギ先生。先生とは同居人になるんだし、先生の様子を見ているとまだ、なにかしら依頼したり、されたりしそうだからね。いちいち名字では堅苦しいだろう。だから名前で良いと言ったのさ。」

「成る程。確かにそうですね。それでは、これからよろしくお願いしますね。真名さん。」

「ああ、よろしく。ロギ先生。」

ある程度の信頼は得られたようですね。安心しました。龍宮・・・いえ、真名さんは仲良くなっておいて損はない人ですから。今回は収穫。と言った所ですかね。

さて、

「そろそろ、会計いきますかね。あ、勿論俺持ちですよ。」

正直金は有り余っている。通帳には0が9個位並んでいますからね。

「そうかい、助かるよ。

・・・あっ、」

「今度は何ですか？」

「いや、この後教室に行かなきゃならないんだよ。

・・・先生を連れてね。」

「・・・？　何があるんですか？」

「いや、先生達の歓迎会をするのさ、早く行かないとね。もう後１０分位だから。」

・・・・ハイ？

「あと、１０分？　って、ギリギリじゃないですか！！！」

「ハハハ、という訳で走るぞロギ先生。主役を遅れさせたら私が非難を受ける。」

「って、自分のためですか！！？　まぁ、いいです。流石に遅れるのは悪いです。急ぎましょう。」

そして、全力疾走。

あくまで、常識の範囲内ですよ？

そして何とか遅れずに済んだのでした。

龍宮視線で見てみよう。（前書き）

連投です。

龍宮視線で見てみよう。

巫女な色黒スナイパー。
龍宮真名だ。

先日、学園長に呼び出され、何かと思って行ってみたら来週来る子供のお守りを任された。

正直に言うと面倒だし厄介だ。だが、貰うものは貰った以上、しっかり依頼はこなすさ。

中々貰えた事だしな。

さて、今日がその子供先生が来る日だそうだ。
私達が面倒を見るのは弟のほうだったね。
学園長曰く、
手のかからない方にしておいたぞい。フォッフォフォフォ。

・・・バルタン笑いが癪だったけど、手のかからない方がありがたい事は確かだ。
そこに一応の感謝はしておく。

さて、先生達が来たみたいだね。
しかし、鳴滝姉妹、春日。意気揚々と罠を仕掛けるな。
これから入って来るのは、
ガラガラガラ、ヒュー、

まだ子供なんだから・・・ピタッ・・・・・な？

な、に？

何故、あの子は魔法障壁を切っていないのだろうか。

あと誤魔化すのはいいが、中々酷いことになっているぞ？

それにしても、相変わらず騒ぐんだね、私のクラスメイト達は。

しかし、誰が収拾つけるんだろうねコレ。

「静かにしてくださいっ！！！」

お？　誰かが見かねて注意したみたいだね。

さて、そっちが弟君か・・な！？

いやいや、確かにお兄さんの方は色々アレだが、弟君まさか、

アルビノだとは思わなかったよ。

しかし、弟君。

「この度、数学の教師、及び全科目の臨時の講師、さらにこのクラスの副担任をすることになりました。

ロギ・スプリングフィールドです。

あぁ、後、名前からもわかるように俺とネギ先生は兄弟です。ちなみに、双子で俺が弟、ネギ先生が兄です。とりあえずよろしくお願いいたします。」

数学教師はまだいいとして、全教科の臨時講師は少しおかしくないだろうか。

まるで超だな。

あと、君達兄弟を見ていると君の方がお兄さんに見えるぞ？　ロギ先生。

放課後。

ロギ先生にお茶に誘われた。
この後歓迎会があるから別に何か食べる必要は無いんだが・・・”甘味処やなぎ”。

まるで私の好みを把握しているかのような店のチョイスだね。
ナイスだよ、ロギ先生。

まぁ、今はそれより、

「それで、先生。私に何の話があるのかな？」

・・・返答は無しか。
なにやら考え事をしているようだが、あまりよろしくないな。
ピキーン！　む、　ゴリッ。
「先生、此方の質問に答えずに、何を考えていたのかな？」

「ええと、何のことでしょうか？　とりあえず下げて貰えます？銃。」

なんとなく、嫌な感じがしたんだ。
まぁ、外れて無さそうだけど、銃は下げるか。
次は無いよロギ先生。

「あぁ、わかったよ。

それで、私に何の用だい？」

「・・・学園長から話しは聞いてますよね？」

「あぁ、君が私と刹那の部屋に居候するという話か。」

「えぇ、それです。
とりあえず今龍宮さんとお茶してるのは、その挨拶です。」

そうすると疑問が有るな。

「そうかい、なら何故、刹那は誘わなかったんだ？」

「えぇ、誘おうとしたんですが、なにやら熱心に近衛さんをストーキングしていて、声を掛けれなかったんですよ。」

あぁ、刹那、ストーキングと勘違いされてるぞ。
護衛に熱心なのはいいが、もう少し考えようか。

「そうかい。
先生、刹那にそういう趣味は無い、・・・・はずだ。だから、刹那に偏見を持たないで貰えると助かる。」
一応フォローはしてやろう。
これから、一緒に暮らすのに、変な空気が漂い続けるのは個人的に遠慮したい。

「・・・・・その間と、筈ってなんですか。より怪しげに聞こえますから。
まぁ、いいです。
どうせ、護衛でしょうから。」

なにっ！！！
何故、先生がその事を知っているんだ！？
もしや、コイツ・・・偽物か？
いや、それは無い。視れば判るしな。ならば何故だ？

「・・・・何故君がその事を知っている？　君は只の修行中の魔法先生の筈だが？」

返答次第では先程下ろした引き金。遠慮無く引かせて貰おうか。

「実は、俺とネギが持っているクラス名簿には少し生徒に関するメモが書いてありましてね。桜咲さんのところには京都神鳴流と書いてありました。
そして、近衛さん。
彼女、やたら膨大な魔力を持ってますねぇ。解放はされていないのか分かりにくいですが、そして近衛という名字。此所、関東魔法協会の理事である近衛近右衛門の孫にして、関西呪術協会の長にして英雄、サムライマスター近衛詠春の娘。
・・・護衛が付いてない方がおかしいですね。」

なんと・・・。
たったそれだけでそこまで解るのか。
随分頭が切れるんだな、ロギ先生は。
しかし、成績のほとんどはネギ先生の方が上だったはずだが・・・

「・・・成る程先生は幾分頭が切れるようだね。
しかし、ネギ先生はまるで魔法関係のことに気づいていない。どうしてだい？」

「ネギはろくに世間の事を知ろうとしません。
あいつは今6年前に会った親父の後を追うのに必死みたいですし、
何より未だ純粋で、魔法は善と正義で溢れてると信じてますから。」

・・・確かに、正しい評価だろう。
しかし、それだと・・・

「そうかい、それにしてもその口ぶりだとロギ先生は色々知っているみたいじゃないか？」

そう言っているように聞こえてならない。

「それは、そうでしょう。そう言っているんですから。メルディアナでは馬鹿な魔法使いが多くて呆れてたんですが、此所もそうみたいですね。
龍宮さんは例外みたいですが」
あっさり肯定、か。
これは素直に驚いた。
まだ、9歳の子供が至れる結論、推論じゃない。
魔法先生だって、ここまで現実を見れている人は少ないだろう。
だが、それより。

「まぁ、そんな話しはここまでにして、どうして私にそんなことを話したんだい？　先生。別に普通に同居するだけならこんなことを話す必要は無いと思うのだが。」

そう、別に普通に同居するだけならこんなことをいちいち確認する必要など、ましてや自分がある程度使えるレベルであることを示す必要など無い。

「実は、俺、魔法薬作ってるんですよ。わけありで。止めるわけにはいかないものですから。」

「成る程。だが、只の部屋で出来るのかい？　魔法薬作成には明るくないが、只の部屋では出来ないんじゃないか？」

簡単な物ならまた違うのだろうが、先生が作るほどの物になるとそういう訳にはいかないだろう。

「いえ、容認して貰いたいのは魔法薬を作成することじゃなく、ダイオラマ魔法球の使用と、黙秘です。」

「！！！　驚いた！　ダイオラマ魔法球を持っているのかい？　先生。」

これは本当に驚いた。
というか驚かされてばっかりだな。
しかしどうやって手に入れたのだろうか、ダイオラマ魔法球は高価だし、万が一自作ならば既に学園長に関知されているだろう。
しかし、そんなことをやらかす程、先生は抜けてはいないと思うのだが。

「えぇ、それで、黙っていて頂けますかね？」

黙秘か、別にそれ自体はまったく構わないがわざわざこういう場を作ってもらっているんだ。
多少の利益は得たって別に構わないのだろう？　先生。

「・・・条件がある。」

フフフ、やっぱりって顔をしているぞ、先生。

「・・・条件、とは？」

当然、

「ダイオラマ魔法球の使用権だ。」

構わない、と言った表情だ。
やはりそれくらいは読んでいたのだろう。
ちゃんと交渉が出来ている。
今回は甘い交渉だったけれど、これが本気ではないのだろう。
明らかに余裕があるし、そもそも交渉相手はこれから同居人になる私だ。
悪印象を与えるような真似をするわけがない。
さらに、まだまだ彼は力を隠している。
私が視てわからないのだからそれこそかなり。
いいよ、とてもいい。

「良いですよ。それではこれで取引成立ですかね？　龍宮さん。」

「ああ、取引成立さ。
あぁ、それと・・・」

これから仲良くしようじゃないか。
だから、堅苦しいのは止めてくれ。

「・・・名前で良い。」

「ハイ？」

「だから、名前で呼んでくれて良いと言ったのさ。ロギ先生。
先生とは同居人になるんだし、先生の様子を見ているとまだ、なにかしら依頼したり、されたりしそうだからね。
いちいち名字では堅苦しいだろう。
だから名前で良いと言ったのさ。」

「成る程。確かにそうですね。それでは、これからよろしくお願いしますね。
真名さん。」

「ああ、よろしく。
ロギ先生。」

あなたといると、退屈しなさそう、
いや、面白そうだ。

「そろそろ、会計いきますかね。あ、勿論俺持ちですよ。」

フフッ。いいね、好印象だよ。

「そうかい、助かるよ。
・・・あっ、」

そういえば、歓迎会を忘れていたな。

「今度は何ですか？」

「いや、この後教室に行かなきゃならないんだよ。
・・・先生を連れてね。」

「・・・？　何かあるんですか？」
ああ、あなたとネギ先生主役でね。
「いや、先生達の歓迎会をするのさ、早く行かないとね。もう後１０分位だから。」
おぉ、呆気にとられた表情してるじゃないか。
「あと、１０分？　って、ギリギリじゃないですか！！！」
まぁ、簡単に言えばそうだ。
「ハハハ、という訳で走るぞロギ先生。主役を遅れさせたら私が非難を受ける。」
「って、自分のためですか！！？　まぁ、いいです。流石に遅れるのは悪いです。急ぎましょう。」
本当に面白い。
三学期までとは言っているが、どうせ来年もそうなのだろう。
これから卒業まで退屈せずにすみそうだ。
というわけでよろしく。
ロギ先生。

デスメガネはそのあとすごすごと帰ったようです。（前書き）

・・・これ、なんて、駄文？
すいませんでした。
感想で前回より早く投稿するとか言っておいて前回より遅いです。
しかも駄文という。

本当にすいませんでした。
ちなみに作者が遅れた理由は、模試やらあったんですが。
なにより時間をとっているのが、
ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　ＢＵＲＳＴ　です。
嵌まりました。見事に嵌まりました。
因みに作者の装備はアサシンとシユウ系装備。ナイフにアサルト、バックラーです。

はい、どうでもいいですね。
ちなみに作者が嵌まってしまったため、遅筆になる可能性大です。
本当にすいませんでした。

デスメガネはそのあとすごすごと帰ったようです。

どうも、皆さん。
なんとかギリギリ歓迎会に滑り込みました。
ロギです。

歓迎会に来ての感想はとりあえず、

お前らテンション高っ！！
ですかね。
なんであそこまでハシャゲるんでしょうか？
みんなのノリが異常です。３―Ａは常にスーパー廃テンショ・・・
もとい、スーパーハイテンションなのでしょうか。

まぁ、そんなことはそこら辺に置いておいてですね。何故、あのデスメガネは俺に手招きしているのでしょう。
正直、無視したいのですが、目もバッチリ合ってしまいましたので無視するわけにはいかなくなりました。
面倒臭い。

「で、タカミチ。何の用ですか？」

「いや、今日初めて教師をやった感想でも、と思ってね。
で、どうだったんだい？」
そんなことですか、そんなことで話し掛けないで欲しいです。
腹の立つ目をした奴とは、話したく無いのですが、
あんまりデスメガネと仲が悪くなると面倒臭そうなんですよね。
仕方ありません。

ノンオブラートで話します。

「そうですね。

とりあえず、長谷川さん以外の人は常識が分かってないですかね。」

おぉ、タカミチの顔が面白いくらいにひきつりましたよ。

よし、もっとやりましょう。

「あとは、何故いつも無駄にテンションが高くて、お祭り騒ぎもいいところなのかが、理解出来ません。

それに、常識を逸脱した人の数が多すぎます。意味不明ですね。」

タカミチがひきつるを越えて、頭を抱えて起伏の無い声で笑ってますね。

気持ち悪いので、放置しました。　ザマァ。

タカミチに構って無いでやらなくてはならないことがあります。

「絡繰さん。少しお話ししてもよろしいですか？」

そうです。

あの幼女吸血鬼こと、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルについてですよ。

本人に直接言ってもいいのですが、場所が悪いので、会談の申し込みです。

「ハイ、大丈夫ですよロギ先生。

それでお話しというのは何でしょうか？」

「えぇ、貴女の主に伝言を、と思いましてね。」

絡繰さんの表情が固くなった気がします。
ロボットの表情は読みにくいですね。

「・・・どのような伝言でしょうか？」

「そこまで警戒しなくてもいいですよ。
まぁ、無理かもしれませんが。
明後日の夜、８時に家庭訪問をさせていただきたいのですが、その時間は空いていますか？」

「ハイ、マスターはその時間は家に居りますので問題はないかと。」

丁度良いです。

「では、伝言よろしくお願いします。」

「ハイ、マスターに伝えておきます。」

これで、準備は整いましたね。
まあ、エヴァンジェリンは６年前に山吹っ飛ばしたアホ親父の情報でなんとでもなりますから、これで問題ないでしょう。

しかし、歓迎会の割に集められている食べ物がお菓子だけでなく、主食類もかなりあるのは何故なんでしょうか？

肉まん系統は超包子からきているにしても、おにぎりとか、焼きそ

ばとかはなんであるんでしょうか？
しかも、もう無くなりそうですし。
あなた方は女子中学生なのによく食べますね。

しかし、それ以上に異常なのはあなた方のテンションです。
くどいようですが、どれだけ騒げば気が済むのかと。

・・・・おや？　一人だけ騒がずにひたすらコーヒー飲んでる娘がいますね。
まあ、そんな娘は一人しか思い付かないと思いますが。

えぇ、彼女はトップネットアイドルにして、優秀なハッカーの”ちう”こと長谷川千雨ですね。

うわ、彼女、なんかブツブツ呟き始めましたよ！
端から見て怪しいとか思われると気づいているのでしょうか？
恐らく、呟かずにはいられないんでしょうね。
俺も今日来たばかりなのに突っ込みどころが多すぎましたから。

まあ生徒の悩みを聞くのも先生の仕事でしょう。
少しは真面目にやりますか。

それでは、誤認識結界と会話偽装結界を張ります。
当然誰にも気づかれないようにね。隠匿は死ぬ程得意です。
誰にも気づかれませんよ。結界を張ったことすら。

「どうしたんですか？　長谷川さん。先程からひたすら何か呟いてますが？」

長谷川さんの表情が変わりましたね。

始めは、驚き、次に諦め、そして最後に無表情ですか。
呟いている自分に話しかけた事に対する驚き。そして、どうせ、自分の悩みは理解出来ないだろうという諦め。
ならば、無難に対処しておこうとするための無表情。
面倒ですねー、ガキなんですから悩みぐらいさっさと吐き出して貰って構わないのですが、

「いえ、何でも無いですよ先生。」

とか、言いやがりますし。まあ見た目子供ですからなんでしょうけど。

「その割には、表情が固いですよ。
特に先生と言ったときが。」

「！！」

隠せるとでも思ってたんでしょうが、甘いです。
伊達に人生長く生きてませんよ。
精神年齢は３０越えてますから。
オッサンだｏｒｚ

ま、まあそれは、置いておきまして、この悩めるリアリストを少しは助けてやりましょう。

「そんなに、驚かなくても良いですよ。
普通子供を先生とは思えませんから。」

「ふっ、普通って。」

「えぇ。
普通子供は先生になれませんし、
普通クラスメイトに留学生は何人もいませんし、
普通経営をやっている中学生はいませんし、
普通ロボットがクラスメイトにはなれませんし、
普通世界樹程の巨木は存在せず、してもギネス等になっているでしょう。」

「そ、そうだよな！！！　普通そんなことありえねーよな！！！
なのに、なんで皆気づかねーんだ！！？私がおかしいわけじゃねーよな！！！　なあ、どうなんだよっ、先生！！！！」

「そうですね。まず、落ち着いて貰っていいですか？　話しづらいので。はい、深呼吸。」

おぉ、素直に深呼吸してますよ。
長谷川さんってこんなに素直でしたっけ？　まあいいです。

「ん、あ、あぁ、そうだな確かに話しづらいわな。悪かったな先生。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。とりあえず、俺が言いたかったことは長谷川さんはおかしくないって事です。むしろ、おかしくないどころか貴女は正常です。
しかし、何故か此処、麻帆良では正常が異常に、異常が正常になってしまいます。」

魔法を教える訳にはいきませんからこれがギリギリですかね。

「じゃあ、私はどうすりゃいいんだ？」

「正直、これをどうこうするのは無理です。ですが、それでは精神的に参ってしまうでしょう？
ですから、せめて愚痴ぐらいは聞きますよ。
と、いうことを話しに来たんですよ。
そういうことを話せる相手がいるか、いないかで全く変わってきますからね。」

「あぁ、そうだな。だけど良いのか？　確かにありがたくはあるが、愚痴を聞くのは辛くねぇか？」

いいですね、本当にこの娘は常識だけでなく、他人を見ることのできる目を持っています。
ですが、今回のそれは要らぬ心配ですよ。

「勿論構いませんよ。何故なら、俺は教師で、貴女は生徒なのですから。」

ついでに、俺は年上であり、経験者でもありますから。
・・・こんな眼を持っていると周りの常識とズレが出てきて当然ですから。
話がズレました。

「あ、あーと。そういえばそうなのか。
だが、それでも無理すんなよ？　まだアンタは子供じゃねぇか。」

「ありがたい気遣いですが大丈夫ですよ。俺はまだまともな人と話したいから言っている面もありますから。」

この学園、というか俺の知り合いでまともな人が片手で数えられる

程度しかいないのは何故なんでしょう。あれ？　目から血液を濾過した液体が・・・

「あぁ、アンタも苦労してんだな。」

「えぇ、ありがとうございます。という訳で、愚痴ぐらいは言って貰って構いませんから。」

「あぁ、ありがとよ、少し気が楽になったしな。」

「そうみたいですね。口調もそっちが本来の物みたいですし。」

恥ずかしいのはわかりますが慌てすぎですよ？

「あ、いや、その、これは・・・」

「別に慌てなくても良いでしょう。そんなことは気にしませんし、むしろそちらの方が本当みたいですし、この麻帆良に違和感を持つ者同士なんですから。」

あれ？　なんか考え込んでますね？
何故でしょう？

「なあ、先生はさ、敬語みたいな口調だけどさ、なんか違和感があるんだよな。」

「・・・・・・」

それに気づくんですか。
いやいや、原作でもそうでしたがどうしてなかなか人を観る目があ

りますね。

「アンタの一人称は俺だろ？　なのに敬語を使ってる。正直アンタが敬語を使ってるのになんか違和感あるんだよ。
私の愚痴を聞いて貰うんだ、アンタも素の口調で別にいいぞ。」

「・・・・・いえ、確かに前はもっと砕けた口調でしたが、今はこっちの口調が合っていますので基本、こちらの口調ですよ。」
とりあえず誤魔化します。
別に今更あの頃の口調にする必要性もありませんし、余程の事がない限り口調も戻らないでしょう。
なら、このままでも特に問題はありませんしね。

「・・・まあ、アンタがそう言うならそれでいいさ。今日はわざわざありがとよ。お陰でなんとか耐えられそうだ。」

えぇ、今はそれで良いんです。
今回の目的は長谷川さんの悩み軽減でしたから。

「どういたしまして。
そろそろ宴会も終わりのようですので、さようなら。また明日、学校で会いましょう。」

さて、あと今日やることは・・・・・辻斬りに色々な説明ですかね。
やれやれ、まだまだ面倒臭そうです。

「は、はくしょんっ！！」

「ん？　どうした刹那。風邪か？」

「いや、別に体調は悪くはないのだが？」

「フム、誰か噂しているのかもな。」

「何を言っているんだ真名。私を噂する人などいないだろう。」

「・・・・それはそれで問題じゃないか？」

「うっ、言わないでくれ。結構虚しいんだ。」

教室の隅で自爆する辻斬りだった。

挨拶と新アイテム登場（前書き）

ＮＯＳよ、私は帰ってきたぁぁぁ～～～～～～。

と、下らないおふざけはそこそこに、

読者様。長らくお待たせし過ぎて申し訳ありませんでした。
ゴッドイーターバーストに首ったけになっていたらいつの間にか学期末。
ＴＥＳＴを終えて、また色々とやることが出来、更新が遅れてしまいました。

今回は久しぶりだと言うのに、短い（泣）。

ですが、更新を再開しますので申し訳無いですが次話にご期待くだ・・・・はっ！！！

そもそも期待してもらえる作品なのか！！！？？

と、まあ自虐も置いておいて、どうやらこの頃以前書いていた《ゼロの使い魔は三番目》の更新を望む声（感想）が来ております。

非常にありがたいです。
ですので、アイデアが浮かんだらになりますがそちらも再開しようかと思います。
それでは、もしもよろしければ、今後ともよろしくお願いいたします。

挨拶と新アイテム登場

放課後、刹那・真名の部屋

どうも皆様、ロギです。
現在、真名さん達の部屋にいます。これからのためのご挨拶です。

「それでは、今日から厄介になりますね。
よろしくお願いします。桜咲さん、真名さん。」

「あぁ、よろしくな、先生。」

「・・・よろしくお願いします。先生。しかし、先生は何故真名を名前で呼んでるんですか？」

桜咲さんは不思議そーな顔してます。
まあ、クラスの人全員に苗字にさん付けでしたからね。

「あぁ、それはな刹那。今日の放課後に先生が世話になる挨拶ということで私とお茶していたからさ。」

そうなんですが、桜咲さんは納得してないみたいですね。

「先生。では何故私を誘わなかったんですか？」まぁ、当然の疑問

ですよね。
ですが、
「いえ、流石に熱心に近衛さんをストーキングしているところに声はかけれませんよ。」
「なっ！？　なな、ななな、ちっ、違います！！　断じてストーカーではありません！！」
いえ、私はそんな気質の者ではなく、とか、お嬢様にそんな気持ちが有るわけでわっ、とか、そもそも私とお嬢様では身分がっ、とか。
すごいあわてっぷりですねぇ。
そんなに慌てられると、
ついつい虐めたくなってしまうじゃないですかぁ（黒笑）
「大丈夫です桜咲さん。ちゃんと解ってますよ。」
おぉ、今度は呆然としつつ安堵ですか。
忙しいですねぇ。
「えぇ、ですから先生からのアドバイスは一つです。ストーカーは犯罪です！
自首してください桜咲さん！！！」
イメージは誤解したままのネギでお願いします。
「ち、違いますロギ先生！！　私は本当にストーカーなどではなくただの護ｅ・・・じゃなくてですね。あの、その！！」

ヤバイです。
何この子、可愛いー♪
どんだけ慌ててるんですか見てて愛でたいような、虐めたいような気分に、ってそれはそれでマズイです。
しかもさっきから真名さんが止めてやれよって、目で言って来てますから取り敢えずからかうのは終わりにしますか。

「大丈夫ですよ桜咲さん。ちゃんと、ストーカーではなく、”護衛”だって分かってますから。」

「そ、そうです！！　私はストーカーではなくて護衛です！！！って・・・・・・・・・え？」

驚愕。

これ以上に相応しい表現が無いと思わせるような表情をしてみたかと思えば、
次には、抜刀しようと野太刀の柄に手をかけてきた。
・・・いや、驚くのは良いんですが抜刀って、どんだけですか。
というか、此所室内なんですけど。

・・・めんどくさっ。
もういいか、タイミング的には誤解フラグがたちそうですが、とりあえず瞬動。
元々、３メートル位しか離れていなかったので、普通は通り過ぎてしまうんですが、生憎普通のつもりは微塵たりともありはしない。
伊達に別荘で丸５年修行してないです。

瞬動で通り過ぎてしまわないように、桜咲さんの前で足を地面につけて無理矢理停止。
それと同時に野太刀の柄を押さえて抜刀させないようにする。

「落ち着いて貰えませんかね。」

「「！！？」」

あっ、真名さんまで驚かせてしまいましたか、まあ、当然っちゃ当然ですけど。

「いやー、駄目ですよ桜咲さん。此所は室内ですから野太刀とか抜いたら駄目です。
本来なら外でもアウトですよ。」

銃刀法違反的に考えて。
あと、室内だと物が壊れそうですから、身の丈超えた野太刀を振らないで下さい。

「しかし、先生。貴方は何者何ですか！？　先生はただの見習い魔法使いの筈です！！　何故ここまでの動きが出来るんですか！？
しかも、何故私とお嬢様のことを！！！」

「そうだね。私も刹那達のことは説明されたけど、ここまで出来るとは思わなかった。正中線をわざとズラして、身のこなしをわざわざ一般人レベルに擬装するなんて良くできるね。」

・・・・あらら、本当に誤解フラグがｗｗｗ（ある意味誤解じゃない）まあ、わかってましたが面倒臭いです。まあ、フツーかつテキ

トーに言っておけばいいでしょう。

「取り敢えず桜咲さん。貴女と近衛さんについては、推測と推理と勘（と原作知識）です。
で、何故俺が強いかと言うと英雄の息子というスペックがバカみたいに高い体と、鍛練の成果です。
あ、一応言っておきますがネギはこんなこと出来ませんし、知りませんよ。ネギは二人の想像する見習い魔法使いで正しいですから誤解しないで下さいね。」

なんか二人とも、えーって感じですね。
まあ、いいですが。

「驚くのは分かりますが、取り敢えず、桜咲さん達の敵ではありませんので安心してください。あと強さ等俺に関することは誰にもバラさないで下さいね。」

「？・・・何故ですか？　先生の正確な強さはわかりませんが、私が気づかないうちに私の抜刀を抑えたのですからかなりの実力者でしょう。
自画自賛のようですが、私や真名は魔法関係者の生徒の中ではトップクラスの実力者であると自負していますし、事実そうでしょう。
なら、その実力は誇って良いものだと思いますが？」

まあ、普通ならそうでしょう。あくまで普通ならですが。

「残念ながら、実力を誇ることは必ずしも俺の益になるわけではありませんから。
さて、そろそろ”アレ”を出しますかね。
真名さんも気になっているでしょう？」

というかこの現状が面倒臭くなってきましたから早く状況を変えたいだけですが。

「ああ、そうだね。そろそろどんなものなのか気になってきた頃だったからね。」

真名さんは如何にも楽しみだという顔をしています。

「”アレ”　・・・・？　先生”アレ”　とはなんですか？」

「それはですね桜咲さん。　入ってからのお楽しみということで。」

「・・・入ってから・・？」

桜咲さんは首を傾げていますが、それを尻目に用意をします。

部屋の角に置いてある子供の俺には大きい旅行カバン。

それを開けると実に様々な物が入っている。

まずは生活用品の類いである洋服、先生という職業上必要なスーツ、さらに革靴、日常で使うスニーカーなど。

魔法関係の類いでは魔法発動体の予備の指輪（普段は宝石に灰色の羽がまとわりついたようなネックレスを使っている）、明らかに実験器具と分かるフラスコやビーカーなど様々な物が入っている。

だが、それらは総じて明らかにサイズが小さい（・・・）

服は実際の大きさよりも3回りほど小さく、

靴もまるで赤ん坊用の靴ほどの大きさで、

指輪なんてビーズより一回り大きいぐらいだろう。

その中からカラフルなフラスコをひとつカバンから出す。
その際にカバンに入っていく手が段々小さくなっていき、取り出すときには手に持ったものが大きく・・・・いや、元の大きさに戻っていく。
実はこのカバンの中は空間歪曲圧縮魔法がかけてあり、中の空間は空間を圧縮してあるので、見た目の数倍はあり、さらに空間を歪曲させてカバンの中身の全体を縮小して一目で見ることができる優れものだ。
完全に手をカバンから出すと如何にも南国というような精巧な模型がボトルシップのようにフラスコに納まっている。
そのフラスコを持って二人の所まで行く。

「・・・先生それは何なのですか？」
桜咲さんは珍しいものでも見るように、
いや実際珍しいですが。
「・・・ほう、それが先生のか、南国タイプだね。」
と、興味深げに真名さんが俺のダイオラマ魔法球を見てくる。
さて、魔力を流してっと、・・・早く入りますかね。

『・・・マスターの魔力を確認。ダイオラマ魔法球、名称（ウィズダム）
転位術式起動します。対象認識システム稼働確認。対象、ロギ・スプリングフィールド、龍宮真名、桜咲刹那。転位術式発動まで１０・９・８・・・・・３・２・１・・・０・・転位術式発動します。』

そして、俺たちの足下に魔方陣が浮かび上がり、

俺たちは音もなくその場からかき消えた。

『・・術式、全て異常無し。お帰りなさいませ、マスター。
そしてお客様方、ようこそウィズダムへ。』

魔改造別荘ウィズダム（前書き）

第一声に遅くなってすいませんでした。
リアルが忙しいので執筆の気力が出なかったんです。本当にすいませんでした。
感想でハーレムにして欲しいとの要望があったのですが、ハーレムにしたいですか？ハーレムにするならメンバーは誰にするかを感想に書いてください。

ちなみに作者はハーレムにするなら、

巫女な色黒スナイパー、ネットハッカーアイドル、革新的ガイノイド、６００年の吸血姫は入る予定です。

どうやら、文章に欠損がありましたので修正して再投稿いたしました。
本当に申し訳ありませんでした。

魔改造別荘ウィズダム

転位術式が起動し視界が光りに包まれて、次に目を開けて視界に入って来たのは女子寮の一室ではなく、太陽がさんさんと輝き、眼下に海と砂浜が窺える潮風が心地好い南国リゾートだった。

「って、なんですかこれは～～～～～～～！！！！？？」

あっ、桜咲さんがいい感じにはっちゃけてます。
見てて愉快です（笑）。
まあ、ダイオラマ魔法球を知らなければ驚きますよねぇ。
まあ、知っている人も、

「・・・かなり立派なダイオラマ魔法球だな。このレベルの物は魔法世界の重鎮でも持っていないんじゃないかい？」

知っているからこその驚きという物があるようです。非常に驚いて目を見開いていますね。

「はいはい、お二人とも驚きはよくわかりますが、立ったまま話すというのもあれですから、お茶でも飲める場所に行きますよ」

二人にそんな声をかけつつ目の前にある転移魔方陣を指差して別荘の中心部にある建物に移動した。

コポコポコポッ

と、ティーカップに紅茶を注ぐ音がやけに響く。

先ほどから二人の視線が、説明しろやゴラァ。とでも言いたげなのでいい加減質問を受けることにしましょうか。

「それで、真名さん。桜咲さん。なにか質問はありますか？」

「・・・では、先生。

その人は一体誰ですか？」

桜咲さんが訝しげに紅茶を注いでいる女性を指さす。

「彼女ですか？　彼女はこの別荘・・ダイオラマ魔法球内の建物の管理をさせてる魔導人形ですよ。

人間に見えるかもしれませんが、魂は吹き込んでいませんのでただのからくり人形みたいな物ですよ」

「・・・もしかして先生は魔法薬だけでなく魔法具の類いも造れるのかい？」

「えぇ、魔法薬も魔法具も俺の得意分野ですよ。

一時期、魔法具売って荒稼ぎとかしましたし、このダイオラマ魔法球を改造したのも俺です」

「・・・そうか、先生。頼みがあるんだが」

「わかりました。それで、注文は？」

「魔法具を売って貰え・・・って、なにっ！？」

あれ？　真名さんが驚いてます。返事をするのが早かったでしょうか。

「何故、私の言いたい事がわかったんだい？」

「何言ってるんですか真名さん。話の流れでわかるでしょう？」

そこまで異常なことではないと思うのですが・・・違うのでしょうか？

「・・・まぁ、瑣末なことはいいか、
それで先生、実はね私や刹那は学園からの依頼で時折学園の警備に駆り出されるんだ」

「なるほど、ここ、麻帆良には世界樹、正式名称『神木・蟠桃』に始まり極東最大の魔力保有量にして、関東魔法協会理事の近衛近右衛門の孫にして、関西呪術協会の長、かの大戦の英雄サムライマスター近衛詠春の娘の近衛木乃香。６００万$の賞金首の真祖の吸血鬼エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。そして大戦最大の英雄サウザンドマスターの息子のネギに俺他にもｅｔｃｅｔｃ」

「・・・関西呪術協会を始めとして、あらゆる魔法関係組織にとって麻帆良は侵攻対象なんでしょうね」

「ああ、だから戦闘をすることが多くてね、魔法具をよく使うから補充したいのさ」

「わかりました。後ほど注文をまとめて言ってください。しっかり用意させてもらいますよ割安でね。
さて、他になにかありますか？」

「それでは、ロギ先生。一体この場所は何処で何なんですか？」

あぁー、そういえば桜咲さんはダイオラマ魔法球を知らないんでしたね。

「ここはダイオラマ魔法球・・・つまりここに来る前に俺が持っていたフラスコの中ですよ」

「へっ？・・・・・・え、えぇぇぇぇーーーーーー！！！」

そんなに驚かなくてもいいじゃないですか。

「ほ、本当なんですかっ！！」

「本当ですよ。しかも此処と外では約２４倍の時間差があります」

「ええっと、つまり？」

「ここでの一日は外での一時間。要は丸一日過ごしても外では一時間しか経ってないんですよ」

「・・・はぁ～、それはスゴイですね・・・」

なかば放心ですか、まあ知らなかったらそれも仕方がない気がしますね。
まあ、そんな桜咲さんは置いといてですね。
「これからどうしますか？　お望みなら別荘内の案内でもしますが？」
「そうだね、これから私にも使わせてもらうから案内はしてもらいたいかな」
「・・・っは！　私もお願いします！」
ん、どうやら予定通りで問題無いみたいですね。
「それでは、行きましょうか」

ダイオラマ魔法球内案内中。

「しかし、あれだねロギ先生。やたらとリゾート設備が充実してるけどどうしてなんだい？」
「いや、ただ単に半端が嫌だったんですよ。御蔭様でかなり豪華になってしまいましたが、快適ですよ？」
「しかし、本当に豪華ですね。温泉にプールにエステ他もまるでア

ミューズメントパークみたいですよ」（しかし、電気はどうしているんでしょうか？）

「こ、これは！！」

「そこは鍛練場ですよ、桜咲さん。例え核兵器が降り注いでも中破ぐらいで済むようになってますから思いっきり技を使っても平気ですよ」

「・・・・・核兵器？」
（先生は一体どんな規模の戦いを想定しているんだ？）

「ここは俺のラボラトリです。決して入ろうとしないでくださいね」

「入らないでじゃないのか？」

「ああ、大丈夫です。入れませんから（・・・・・・）」

ポケットからネズミの玩具を出してラボの入り口に投げる。

途端、ネズミの周囲に魔法陣が数えきれないほど展開し、それぞれから光、闇、火、氷、砂、風、雷などの魔法の射手が秒間数百発ほど降り注ぎ始め、ネズミの玩具が消滅してようやく魔法陣が消える。

「「・・・・・・・・・」」

「トラップがありますから。もちろんアレだけではありません、もっと絶大な破壊力や危険性を孕んだ罠が俺以外には降り注ぐ様になっていますから気をつけてくださいね」

（あ、あれ以上っ！！　・・・ロギ先生は怒らせないようにしよう。うん、そう決めた）

（・・・ロギ先生がそれほど隠したがるとは、是非とも中を見学してみたいが――まともに行けば死ぬな、間違いなく。・・・都合が良いときに先生に頼むことにしよう。それと先生、君は強すぎだな。どんなことをしたのやら）

刹那は単なる恐怖を、
真名は興味と畏怖を、
互いにロギに対して抱いていた。

そして、当人のロギはというと、

（うーん。あと他にどこか案内するべき場所はあったでしょうか？）

全く気にしていなかった。そも、彼にとってはここ2、3年で罠等より強力な力を振るい、振るわれており、感覚が常人に比べて全く違った物になっているので、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

こうして、彼らの認識は少しズレつつもダイオラマ魔法球の案内は終わり、中で一日過ごしてから三人は寮に戻った。

女子寮にて

「先生、私にも鍛練場を使用させて頂けるでしょうか？」

「別に構いませんが、多用はオススメしませんよ？」

「な、何故ですか！？」

「それは、年取りますから。女性にはかなり致命的だと思いますよ？」

「あ、ああーーーー！！　そ、それはっ！？　しかしお嬢様のためにはっ・・・」

うーん。見てて面白いのですが、こんなに悩むならこっちで決着つけてあげますか。

その後うまい具合に丸め込まれて週一回程に制限されて、悔やみながらも少しほっとしている女の子らしい姿があったとかなかったとか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7750p/

ネギの弟？に転生、適度に生きたい。

2011年5月19日09時53分発行